

風来山

イラスト kero介

GenoCide†Reality

Story by huuraisan

Illustration by

kerosuke

# シェノサボ・リアリティ

異世界迷宮を最強チートで勝ち抜く

特別試読版

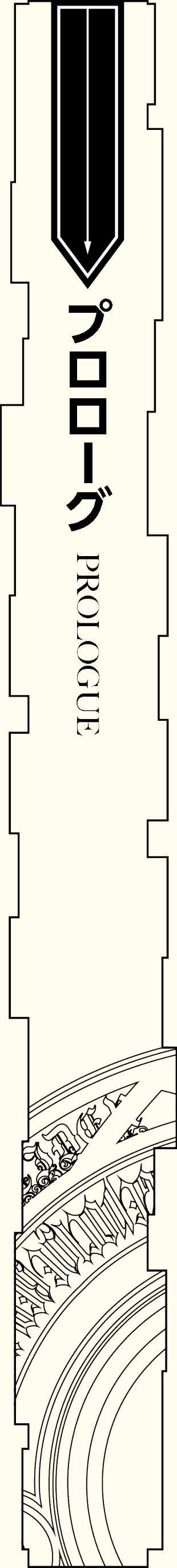
異世界迷宮を  
最強チートで  
勝ち抜く!!

「小説家になろう」超王道!!

書き下ろし短編2本収録!!

GA文庫

孤独な少年がダンジョン深く潜る異世界最強ファンタジー!!



# プロローグ PROLOGUE

仄暗い松明の灯りの下でも、鑄びたショートソードの剣先からどす黒い血が滴つていてるのがハツキリと見えた。猫背で鎧(ゴブリン)だらけの凶刃を構えるその姿は、子供ぐらいの背丈の小鬼。

皺(しわ)だらけの肌をしたモンスター。

そう思つて、つい笑つてしまふ。  
化け物だと?

だが、これは現実だ。

ゴブリンと俺の間には、絶叫しながら石畳の床を転がり回っている男子生徒がいる。

腹をショートソードで刺されたのだ。まだ死んではいないが、おそらく命に関わる重傷。

痩せぎすのゴブリンは、死にかけている男子生徒を突き刺すのを止めて、今度は俺に血の滴る凶刃を向ける。

「キキキキ……」

老婆ろうばのような醜い顔のゴブリンは、子供のように甲高かんだか

い声で笑つた。赤く濁つた眼が、俺を捉える。

ショートソードが繰り出される。

——殺らなきや、殺られる。

そう思つた刹那せつな、もう俺の耳には刺された生徒の泣き

叫びも、周りの戦闘の音も聞こえなくなつていった。

静寂の中で見えるのは、目の前の『敵』だけだ。手に握つた掃除用モップの柄えを強く握り締める。

「うおおお！」

俺は渾身こんしんの力で、ゴブリンの頭にモップを振り下ろす。

「ギイツ？」

ハツ、何だこいつ。怯おびえてやがるのか？

ゴブリンの頭を狙ねらつた俺の一撃は見事に空振りだつた。

相手の肩に浅くかすつただけ。

だが、俺の気迫に敵が圧されて、逃げ腰になつたのを感じた。流れが変わつた。

そうだ、殺らなきや殺られる。

「俺は、殺る側だ！」

見掛け倒しの雑魚め。

殺りにきておいて、自分は殺られないとしても思つたか。小鬼のモンスターと俺は、身体能力でさほど差がない。上背はこちらのほうが勝つてる。

そして何より、敵が持つているショートソードに対して、俺のモップは倍のリーチがある。

この差は、圧倒的。

再び、渾身の力をこめてモップの柄を、屈んだ小鬼の頭に叩きつける。

グニユツと、小鬼の柔らかい頭部が砕ける感覚。

頭を叩き割られた小鬼は、「ギャツ」と悲鳴をあげて

その場に倒れた。

これで終わり?

まだだ。確實に殺らなきやな。

俺は、もう一度モップを振りかぶつて小鬼の頭部に思いつきり叩きつけた。

緑色の頭は、腐ったキヤベツみたいにグシヤリと砕け散つて、床に汚らしい体液をまき散らした。

「……ハツ、ハア」

詰めていた息を大きく吐き出して、口内に湧いてきた唾液を飲みこむ。心臓は、早鐘のよう打ち続けている。

碎けた頭から、緑色の脳漿のうじょうをまき散らして倒れている小鬼の化け物は、完全に死んでいる。

俺が、殺つた。

もちろん殺したのは人間ではない。俺を殺そうとしてきたモンスターだ。

しかし、人の形をした生き物を潰<sup>つぶ</sup>した感触と死体から立ち上る独特的の腐臭は、吐き気を催す後味の悪さを感じさせた。

喉<sup>のど</sup>が渴く。

だがそれ以上に、不思議な感動が胸に湧き上がる。目の前で死んでいる敵よりも、俺は強かつた。だから勝つて生きている。

叫びだしたくなるほどの激しい愉悦があつた。

俺はついさっきまで普通の高校生だつたのに、なんで

こうなつたんだつたか。

そんな微かすかな思いが俺を追憶へと誘おうとするが、目の前の危機的状況は感傷に浸ることを許してはくれない。

「キヤアアア、また来たあ！」

傍かたわらの女子生徒女子生徒があげた悲鳴。

俺達を皆殺ジエノサイドしにしようと狙うモンスターの一団が、もう石畳の通路の奥からやつて来ている。

それが今の現実ならば、考えるのは後回しだ。

まず目の前の敵を全て潰すしかない。

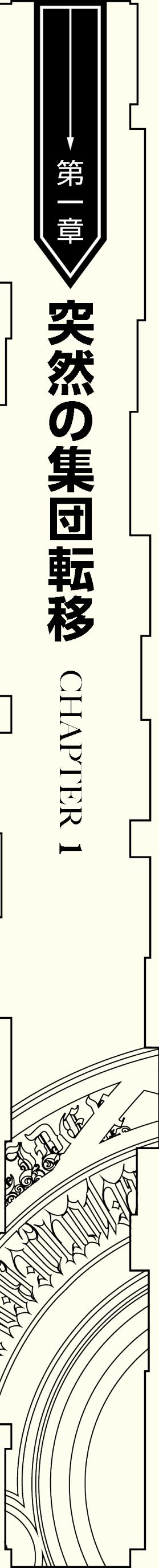
無心になつた俺は、手に構えたモップを強く握りしめて、次の瞬間にくるであろう戦闘を待ち受けた。

——殺せ！ 奪え！ 生き延びたければ、誰だれよりも強くなるしかない。

そうだ。俺は誰を殺しても絶対に生き残る。

最後まで勝ち続けて、このジェノサイド・リアリティーを骨の髓まで味わい尽くしてやる。

薄暗いダンジョンに響き渡る禍々しき化け物どもの咆哮と、立ち向かう生徒達の怒号と悲鳴は、いつ果てるともなく続いていた。



事の始まりは、教室で起きた地震だった。

教室全体が揺れ始めて、斜め前の席の女生徒おれが耳障りな金切り声をあげたので、本を読んでいた俺は不愉快だった。

地震ざいごときで騒ぐなよ。

大した揺れでもないだろ。お前ら、何年日本人やつてるんだ。

そう思つたが、一向に騒ぎは収まらない。

一年F組、狭い教室ですし詰めにされている三十人の高校生があげるざわめきは、地震よりもよっぽど騒がしい。

国語教師の浦部<sup>うらべ</sup>が、ようやく「みんな落ち着いて、机の下に隠れなさい」と叫んで、みんな思い出したように机の下に隠れて静かになつた。

これで、読書に集中できる。

そう思つたが、揺れば激しくなる一方で、本を読むのは無理だつた。

「しゃあねえ」

本を閉じて、机の上に置く。

読もうとして本を読めないのは不快だつたが、俺以外

全員が机の下に隠れている光景は思つたよりも爽快だつた。

「ふん、悪くはない」

幾分か、陰鬱な教室の空氣もいつもより風通しが良くなつたようと思える。

奇妙なほど長く続く不気味な揺れば激しくなる一方で、ときおり机の下から漏れる悲鳴も段々と静まつてきた。

本当に危機を感じた時は、押し黙るというのが生物の本能なのかもしれない。

黒い埃が落ちてくるので見上げると、天井から降つてきていた。

古い校舎だから、そのうち埃だけじゃなく蛍光灯や窓ガラスが割れて、俺に降り掛かってくるかもしれない。

そうなつたら死ぬかもしれないとは、理性でわかつた。だが俺が死ぬこと自体、本当にどうでもいい。だから、他の奴みたいに机の下に隠れようとも思わない。

死ぬつて、くそつたれな俺の人生が終わるだけのことだろ。そこには、何の意味もない。

「全部つまらんことだ」

今死んだとしたつて、唯一の心残りは今読みかけていれるハンナ・アレンントの『責任と判断』が最後まで読みきれなかつたことぐらいか。

そんな思いすら、死ねば即座に消え失せるだろう。

なるほど、この非日常に感じる奇妙な爽快感の正体はそれかと、今さら気がついた。

目の前の現実が全てリセットされたら、せいぜいするつてものだ。

俺だつて死にたいわけじゃないが、生きることにすがる理由もない。

そんな半ば悟つたような気分で、俺は椅子<sup>いす</sup>の背に身体<sup>からだ</sup>を預けた。

そのうち揺れの性質が変わり、もはや激しい揺れは地震ですらなくなり、エレベーターで降りていくような、足元がふわりと浮く不気味な浮遊感に変わる。

まるで、教室<sup>じょう</sup>と奈落の底へと落ちていくような感覚

に身を委ねるうちに、俺の視界は闇に覆われた。

一瞬、目の前の世界が暗転して、本当に死んでしまつたのかと思つたが、ただ蛍光灯が消えただけのことらしい。

それにしたつて真昼間から、教室が暗闇に沈むとはおかしいが。

「なんで真っ暗になつたの？」

誰だれか何とかしてよ」

「電気、誰か電気つけろ！」

暗闇の中、困惑した生徒達が呼び合う声とともに、闇の中に、ポツ、ポツといくつか明かりが灯る。

そうだ。

みんなスマートフォンという便利な光源を持つていて。俺も、学生服のポケットからスマホを取り出す。  
仄かに点ともる明かり。画面のロックを外して、まず確認したのは、携帯の電波。

巻外……。

これでは、何の災害なのかネットで調べることはでき  
ない。それどころか、救援すら呼べない。

いくら災害でも、街なかにある学校で電波が届かなくな  
なるなんてあるだろうか。

あるいは、さつきの不気味な落下の感覚が正しいとす  
るなら、地面に大穴でも開いて教室ごと落ちてしまつた  
のかもしれない。

そうなると、いきなり真っ暗間から暗闇になつたつてのも説明が……。

「いや、そりやないか」

エレベーターだつて、ロープが切れて落下すれば箱の中の人間は無事では済まない。

俺の席は、後ろの窓際だ。

落下の衝撃があれば、窓ガラスが割れてないはずがない。

スマホに映る時刻は、午前十一時二十六分。あれほど長く感じた地震は、たつた五分程度のことだつた。

携帯から拾える情報はもうなさうだ。

何気なく、外を確認しようと窓の外をスマホのライト

で照らして、俺は驚いた。

「なんだこりや……」

目の前のものが信じられなくて、窓をガラリと開けて直接手で触れてみる。

窓の外は、びつしりと石に覆われていたのだ。

「いきなり暗くなつたのは、このせいいか……」

真つ暗闇になつたのは、俺達の教室が石壁で囲まれたせいだつたのだ。

ゲームのダンジョンじゃあるまいし、石の中にいるなんて、冗談にもならない。

これはちよつと笑えない、少し頭が冷えた。

「しかし、石壁つてふざけてやがる」

何度も触つても、石壁は石壁のままだつた。

「ゴツゴツした石は、磨かれたようになべなべとしていて、少しひんやりとしている。

「とりあえず、動くか……」

俺はまず、靴を上履きから机の脇に掛けてあつた体育馆シューズに履き替えた。

上履きよりこつちのほうが断然動きやすい。

「おい、なんで蛍光灯が点かないんだよ、どうなつてんだ！」

まだ石壁に閉じこめられたことに気がついてない愚かな男子生徒が、明かりのスイッチを力チカチ押しながらそんなことを叫んでいた。

「どうなつてんだよ」なんて、みんなが知りたいことだろう。

だが男子は「どうなつてんだよ」の大合唱だ。もちろん聞くだけで、答えられる奴はない。

「なんなのよこれー、もうわけわからんない。誰かなんとかしてよー」

暗闇で誰が誰だか見分けもつかないが、女子の中には泣き出してしまっているのもいる。

全くうるさい連中だ。泣き喚わめいて事態が好転するなら、いくらでも泣けばいいんだけどな。

教師が騒ぎを鎮めてくれればいいんだが、教師自体も困惑しているようで「とにかくみんな落ち着きなさい！」

としか言えてなかつた。

落ち着けと言つて、落ち着く高校生ガキ<sup>ガ</sup>がいるものか。  
 「先生、こういう時はクラスで纏まとまつて校庭に避難する  
 べきではないでしようか?」

みんなが騒ぎ立てている中に、落ち着いた声が響き渡  
 つた。おそらくいつもF組で取りまとめ役を引き受けて  
 いる級長の女子の声だ。名前はなんだつけ、たしか竜胆りんどう<sup>みょうじ</sup>つて妙な苗字みょうじだつたか。

災害時に纏まつて避難つてのは、発想として至極真つ  
 当なものだ。

少なくとも防災訓練ではそういうルールだ。こんな状  
 況でも、少しあは冷静に頭が回る女子もいるんだと思つ

た。

その竜胆級長の問いかけにも、教師は頼りない。

「いや、しかし勝手に避難して怪我人けがでも出たら責任問題が……そうだ、こういう時には避難誘導の放送があるはずだから、まずそれ待とう」

自分が責任を負わない方法だけ考えて、モゴモゴ口を動かしている。

つまらん授業しかできない教師だと思つてたが、やはり頭が悪い。蛍光灯の点かない時点で放送なんてできなことを理解しろよ。電気が切れてるんだぞ。

「先生、お願ひですからしつかりなさつてください！」  
「だがそういうつてもな……ああそうだ。ここは、他の先

生方とも相談しよう。そうしよう……」

本来、生徒を統率するべき教師がこの体たらくでは、騒ぎも収まるまい。

そもそもこんな教師に連れられて避難するなんて御免なので、それについてはどうでもいい。

クラスのアホどもも勝手にしたらいい。こういう時、信じられるのは自分の判断だけだ。

俺は俺で、勝手にやらせてもらおう。

他の奴は放つておいて、まず教室の外に向かおうと、スマホのライトアプリを起動させる。

注意深く、足元を照らす。

激しい揺れのせいか、一部の机が横倒しになり、中身がぶち撒けまられてひどい有り様だ。ロッカーが倒れて、これも中身が飛び出している。さつきの激しい音はこれか。

俺は、床に落ちて いる掃除用具のモップを一本拾つた。何が起きるかわからない状況において、得物があれば何かと役に立つかもしれない。

『ロールプレイングゲームRPGなら、『真城しんじょうワタルはモップを装備した』』とで

も出てくるところだ。

「遊んでる場合じゃないか」

冷静にならなきやと思う半面、この非日常感にちよつと心が浮き立つ自分がいた。

「さてと……」

無能教師や、泣くだけのクラスメイトを無視して、床に散乱した物を踏まないよう気につけながら薄ぼんやりと明かりが漏れる廊下に出てみる。

ガラリと引き戸を開けて、絶句した。

教室の外には見慣れたはずの廊下がなく、石畳の通路になつていた。

それが、見渡す限りずっと続いている。

初めて見る異様な光景だが、俺は強烈な既視感を感じた。

「マジで、RPGのダンジョンかよ」

床も壁も石のブロックで構築されている。時間に磨か

デジヤビュ

れたつるりとした石の光沢が、本物の洞窟だけにある重厚感を感じさせる。

廊下から漏れていた光は、たいまつ松明の炎だつたらしい。石の壁に等間隔に鉄の金具が設置され、そこに燃え盛る松明が立てかけられていた。

手に持つてみると、木の棒の先に布が巻かれているのがわかる。布に可燃性のものを染みこませて、それを燃やしているわけだ。煙には鼻にツンとくる独特な強い匂いがある。人工物ではなく、まっやに松脂の松明なのだろうか。こんな物を、誰が……？

石の廊下も、古ぼけた鉄の金具も、まだ真新しい松明も、誰かが作らない限りは存在しない。

学校の廊下が突然何かの遺跡か、あるいはダンジョンの通路に変貌してしまった。

石の通路を目を凝らして眺めると、点々と松明の灯りが見えた。

誰か知らないが、ご丁寧にきちんと照明を用意していくれているらしい。

「……だから、誰かつて誰だよ」

自分でツッコミを入れてみる。

もしそんな誰かがいるとすれば、今回の異変を画策した人物ということになるか。

ダンジョンと表現するしかないこの人工建造物に、松明の灯り。少なくとも、自然現象でこうなるとは思えな

い。おそらく何者が何らかの意図を持つてこうしたと  
考えるべきだろう。

俺達に恨みを持った奴か、あるいは……。  
まあでも、今それを考えて仕方ない。情報だつてま  
るでない。

こんな状況でまずやるべきことは……。

「探索に行くの、真城くん？」

俺の思考を、涼やかな声が遮<sup>ささえぎ</sup>つた。

「なんだ……瀬木も出てきたのか」

どこの美少女が来たのかと思つたら、俺と同じクラス  
の瀬木碧<sup>みどり</sup>だつた。

勘違いしないように言っておくが、瀬木は歴とした男



子生徒だ。

詰襟つめえりの学生服に身を包んでいても、女子が男装してるようにしか見えない顔立ちなので、いちいち断つておかないと紛らわしい。

鮮やかに青みがかつて見えるセミショートの黒髪、中性的な整つた顔立ち。化粧もしてないはずの生白い肌は、今時のケバい女子高生よりよっぽど美少女だ。

そんな瀬木は宝石のような美しい瞳ひとみをしていた。松明の灯りに照らされて、黒目がちの虹彩が緑がかつて見える。その瞳の色から、碧なんて、女みたいな名前を付ける。されてしまつたと、いつか話してくれたことを思い出した。

「うん、真城くんが、出ていくのが見えたから……追いかけてきたんだよ」

「この暗闇で、よく俺が動いたのに気がついたな。眼がいいんだな」

瀬木の瞳は、美しいだけでなく観察力も鋭いらしい。追いかけてきたのが瀬木だつたのは幸運だつた。クラスの他の連中なら誰一人として連れて行きたくないが、瀬木ならば一緒に行くのもアリだろう。

「誰でも見えるわけじやないんだけどね」

ブカブカの学生服の袖<sup>そで</sup>を口元に押し当てる話す瀬木。その足元を見ると、ちゃんと上履きから体育館シユートズに履き替えていた。

地震でガラスが割れたりして、危険がある可能性を想定したんだろう。普段は大人しく温厚で、女子よりも可愛らしく見える瀬木だが、その実鋭い注意力を持つていて頭が切れる。

その美少女ぶりを見ていると男子つてところに「はてなマーク」が付くけど、できる奴には違いない。連れて行けば役に立つこともあるだろう。

「このまま教室にいても埒<sup>らち</sup>が明かない。廊下の先を調べてみようぜ」

「真城くんがそう言うなら行くのは構わないけど……丈夫かな？」

「大丈夫かどうかは知らんが、教室に留まつても何も

始まらないことだけは確かだろう？」

「そうだね。廊下に出来るのも怖かつたけど、こうして見ると灯りがあるだけ教室よりマシみたいだしね」

おつかなびつくり周りを見回す瀬木を尻しりめ目に、もう片方の手で松明を取ると、廊下を見据える。

石畳の通路は、廊下だつた時と同様に、教室の扉から出て左右に分かれていたが、まずは左側にある隣の教室を確認してみることにした。

俺のクラスはFクラスだから、左に進むとE、D、Cといつた順に教室が並んでいる。

教室の前を通り過ぎ、まずは隣のEクラスの前まで進んでみた。

通路はひんやりとした空気が満ちていて、まるで本当のダンジョンのようだ。

そんな折、隣のクラスからも生徒がゾロゾロと出てきた。いつまでも教室でグダグダしていくF組と違つて、E組は集団で纏まつて避難することを選択したらしい。ただ、避難するといつてもどこに行けばいいのかつて話もあるが。

「おい、これどうなつてるんだ？」

E組の見知らぬ男子生徒が、先に通路に出ていた俺と瀬木に聞いてきた。

「そんなの俺達が知るかよ」

「チツ……、お前らの持つてる松明はどこで手に入れた

んだ？」

「通路のそちら中にあるだろ。それを一つ取つただけだ」

「確かにあるな。でもこれじゃまるでダンジョンじゃないか。一体どうなつてんだ？」

だから、知らないいつて言つてるだろ。

話をしてないと不安になるのか、妙に馴れ馴れしく絡から<sup>な</sup>んでくる。

俺の持つた松明に興味津々だつたE組の男子に、他の男子が声を掛けた。

「おい、F組のアホ相手にしててもしようがないだろ。それより先生が一旦いったん集まれつてよ」

アホで悪かつたな。

こつちだつて、E組の集団を相手にしててもしようがないので、無視して通路を先に進む。

うちの高校、優凜学園高等部一学年は、六クラスある。  
A、B、C、D、E、Fと、入試の成績順で振り分けられているわけだ。

おっぱいのサイズでいえばFが最高だろうが、残念ながら成績ではAが一番上で、俺と瀬木がいるF組が最低だ。

うちの高校は県下でも有数の進学校なので、F組でもそこまでバカつてわけではないが、やはり校内でもヒ工

ラルキーというものが厳然とあつて、F組は見下される。

F組は進学校にもきちんと存在する不良（しかも気合の入つてない中途半端<sup>はんぱ</sup>な連中）とか、事情があつて留年した者とか、単純に俺のような不眞面目<sup>まじめ</sup>な生徒もいるごつた煮のようなクラスだ。

瀬木は生まれつき身体が弱く、入試後のクラス分けテストの時にも体調を崩していただそうだ。そうでなければ、たぶんもつと上のクラスだつただろう。

そんなことを考えながら石畳の通路を突き当たりまで進むと、一年の教室はA組からF組まできちんと揃つていた。

「ここで、行き止まりか」

本来ならこの廊下が下駄箱につながつていて外に出られる玄関があつたのだが、石で覆われてしまつていた。ここに存在するのは一年A組からF組までの教室だけだから、それ以外がどうなつてているかは知る由もない。二年や三年の教室や、他の棟にあつた職員室などはどうなつてるんだろう。

瀬木は、本来なら外に繋<sup>つな</sup>がる通路があるはずの石壁に触れて、考えこむように呟<sup>つぶや</sup>く。

「外には出られないみたいだね」  
「ああ、そうだな」

A組の前にあつたはずの昇降口が潰<sup>つぶ</sup>された。突き当たりの石壁を隅々まで調べて、浮かない顔をしている瀬木

の気持ちはわかる。

先にこつちを見にきたのは、もしかしたら外に出られ  
ないかという期待もあつたのだ。

「今回の事件は事故だと仮定しても不可解な点がありす  
ぎるね……」

「同感だ。ただ、今そのことを考へても仕方がない。ど  
うせ何もわからんんだからな」

何らかの判断を下すにしても情報が足りなすぎる。來  
た道を引き返して反対側の探索を進めようと言おうとし  
たところで、こんな時におまわり会いたくない人物と出く  
わしてしまった。

「あつ、もしかしてワタルくん？」



薄闇の中でも、松明に照らされる彼女の輪郭から、俺にはすぐに誰か判別できた。

艶やかな長い黒髪に、二重まぶたのつぶらな瞳。やたら整った気品のある顔立ち。背丈はやや低くほつそりした身体だが、揺れる薄紅色のプリーツスカートと白いセーラー服がよく似合っている。

うちの学校の女子の制服は白っぽいから、暗闇でも目立つ。

「瀬木、逆の廊下を行つてみよう」

何とか気が付かなかつたことにして、そのまま引き返そうとしたのだが、回りこまれてしまつた。お前は、PGに出てくるモンスターか。

「ああっ、ワタルくん！　無事でよかつたわ。真っ先に私の下に駆けつけてくれたのね。さすがは私の王子様ね」

「別にお前に会いに来たわけじゃねえよ……」

一年A組の副級長。九条久美子くじょうくみこだ。

久美子は成績で総合学年二位をキープしている、A組でもよりすぐりの優等生だ。おまけに、家柄もよろしい九条家のお嬢様。見ての通り、かなりの美少女でもある。その優秀さは、一年生なのにその才覚を囁き望されて生徒会役員も務めているほどだ。

ちよつと小柄なところはマイナスだが、スレンダーナ体形にアイドル並みの整った顔立ち。

こういう見た目が美しくて清楚なお嬢様はモテる、だから久美子は学校でもファンが多い。

外目だけ見たら、まさに理想のヒロインだろう。しかし、俺は理由があつてこいつのこと苦手としている。

そもそもF組で劣等生の俺と接点なんてありようもない高スペック女子なんだが、ひょんなことから俺はこの清楚なお嬢様を気取っている久美子の本性を知ってしまった。

それ以来、なにかというと絡まれて付きまとわれる日々が続いている。

クラスが違つて幸いだつたと思える程度に、ことあるごとにまとわりついてくる久美子の存在はうつとおしい。

外見通りのお淑<sup>しと</sup>やかなお嬢様なら良かつたのだが、やたらベタベタと絡んでくる女は苦手だ。

「来てくれてありがとう。私、すぐ不安だつたの…」

「うるせえ、お前に会いに来たわけじゃないって言つてるだろ」

俺の抗議も虚<sup>むな</sup>しく、久美子は思いつきり俺の身体を抱きしみてきた。温かい体温と柔らかさを感じる。瘦<sup>や</sup>せてほとんどないよう見えるくせに、胸の柔らかい感触がしつかりとあるのは反則だ。

腕にわざと胸を押し付けてきていたのだとしたら相当な策士だ。この異常事態のさなか、それどころじゃない

とわかつてゐるのに、久美子の長い髪からはいい匂いがするし、女に抱かれた感触を心地よいと感じてしまう男の性に我ながらムカつく。

右手に松明、左手にモップの柄えを持つていたために、俺はされるがままだ。

松明を持つてゐるから危ないと思つてこつちが大人しくしていれば、好き放題しやがつて。

調子に乗つた久美子は、身を寄せたまま今度は瞳を閉じると、唇を尖とがらせて迫つてくる。

「お前はアホなのか。今はサカつてる場合じゃねえだろ」

「あら、サカるなんて下品ね。ワタルくんが助けに駆け

つけてくれて、せつかくお姫様気分だつたのに……」

「随分と余裕があるじゃねえか」

「王子様がお姫様を助けだしたら、次はキスの展開つて昔から決まつてるでしょ？」

「こいつ、不安になつていたとか絶対嘘<sup>うそ</sup>だろ。」

久美子はちよつと頭がおかしいレベルで肝が座つてゐる女だから、こんな状況の時にもふざけている。

しかし、久美子。今は本当に遊んでる場合じゃないぞ？

「冗談も大概にしないと、手を滑らせて松明をお前の頭の上に落とすぞ」

「もー、ワタルくんつたら、真剣に怒んないでよ。緊迫

した場を和まなうとしたジョークじゃない。私もこんな緊急時に本気でふざけたりしないわ」<sup>なご</sup>

こんな時に冗談言つてる段階で完全にふざけてるわけだが、完全に狙つて言つてるだろ。

こつちが二の句も継げずに呆れないと、久美子は急に俺から離れて優等生モードに変わつた。

「それで、ワタルくんはこの現象をどう解釈しているのかしら？」

優等生らしいキリツとした顔で、スカートを手で払いながらそんなことを言つてくる。

他の生徒が近くを通りかかつたからだ。A組の副級長である久美子は、これでも優等生を気取つてゐるので、

他人の目があるとまともに戻る。

いつも優等生モードなら、俺も久美子を苦手とすることはないんだが。

「そうだな……地震が起きて、収まつたあと、俺達はF組からA組までの通路を歩いてきた。こつちは壁で行き止まり。F組の向こう側は、さらに先があつた。確かなことはそれだけだ。あつ、念のために聞くが、A組の教室の窓はどうだつた？」

「窓は全部調べたけど、外は完全に石に塞<sup>ふさ</sup>がれてたわ」

「F組も同じだ。それならたぶん、A組からF組まで全部、窓は石壁に塞がれてるんだろう。解釈するも何も、結局F組の通路の先を行くしか道がないってことだ」

「なるほどね」

九条のお嬢様は、さすがに優秀だ。

おおよそ俺達と同じ思考ルートをたどつて教室の外に出てきたのだろうが、調べるところはすでに確認済みで話が早い。

馴れ馴れしい態度や破綻している性格はともかく、この事態でも平然としている度胸と能力の高さだけは認めざる得ない。

それに、窓を全部調べただけ俺よりも注意深く慎重であるともいえる。

「じゃあ、さっそく調査に行きましょう！」

久美子も頭は切れる。役に立たないことはないだろう

から、連れて行くのもやぶさかではないのだが……。

「この状況で腕を絡めて俺の利き腕を潰すとか、お前本当に状況わかってるのか？」

歩き出して、A組の生徒達と離れてしまつた途端にこ  
れだ。

この非常時を楽しんでいるとしか思えない。

「あら、ワタルくんの両手が塞がつてゐみたいだからモ  
ップを持つてあげようと思つただけよ」

「モップを持つのに腕を絡める必要はないだろ。武器と  
明かりは両方必要なんだよ」

俺が苛々してそう言うと、久美子はむくれた顔で唇を  
尖らせて、撻んだ腕を渙々と離した。ピクニツク気分も

いい加減にしろ。

そんなやり取りをしているうちに、いつの間にか教室の外にたくさん生徒が出てきていた。

どこの教室も石壁に窓を塞がれているつてことにようやく気がついたんだろう。

普段はA組以外の生徒の前でも猫を被かぶつて他人の眼をやたら気にしている久美子が、いくらA組の連中が移動したからといって、人前でこんなにはしゃぎ回つて過剰にスキンシップを求めることは珍しい。

もしかしたらわざとおどけて見せてるだけで、実はこいつなりに不安がつてるんじゃないだろうか。

それはそれで、ウザいことに変わりはないのだが。

瀬木も俺と久美子の掛け合いを眺めて呆れていた。

こんな状況で久美子に会つてしまつたのは本当にアンラッキーだつた。A組のほうじやなく、最初から反対側に行けばよかつた。

終わつたことを言つても仕方がないので来た道を引き返して行くと、C組の前辺りで各クラスの教師達が集まつて善後策を協議しているのが見えた、

俺達が勝手に動きまわつても注意しようともしない。深刻な顔で話し合つてゐる彼らは、どうやらそれどころではないらしい。

こんな状況で大人を頼りにしてもしようがないので好都合だ。勝手にさせてもらおうとF組の前まで進んだ。

F組の前を通り越すと、反対側は石畳で構成された広間になつていた。

広いこと以外特に通路と変わりはないが、松明の数が多くて明るい。

無造作に先に進もうとする瀬木に、俺は声を掛けた。

「待て、瀬木。そんなにズンズン進むな」

「え？　でも、先まで行くんじやないの？」

「注意して進めつて言つてるんだ。こういう場所でいきなり道が広がつたら要注意なんだよ」

「それつて……RPGみたいに、畏わながあつたりモンスターが出てくるつてこと？」

瀬木は慌てて足を止めると、少しおどけた口調でそう

あわ

言つた。でも全然笑えていなかつた。震える□元からは恐怖心が透けて見える。

罠にモンスター。今の状況からすれば、全く冗談になつてない。

「三人もいるのに俺達が持つているのはモップが一本に松明が一つか。素手では心もとないし、念のためもう一度戻つて何か武器になるものを探すか」

「ねえ、真城くん。化け物が出るとか、冗談だよね？」

瀬木は自分で言つたことで自分が怯えてしまつたようだ。

全くしようがない。

「瀬木。お前は観察力があるしいい眼を持っているんだ

から、怖がつてないで周りをよく見ろよ。そうすればモンスターはともかく、罠はわかるんじゃないか?」

「そんなこと言われても……えつと確かにあそこら辺の窪みは少しだけ気になるけど」

瀬木が指差す先、石畳に線が入っているのがうつすらと見えた。ちょうど、広間の中央から左端辺りか。

俺も言われないと気が付かなかつた。この松明の薄明かりで、よく見えたもんだ。

「やつぱり瀬木の眼の良さは頼りになるな。よし、モップでその辺りを突つついてみるか

「えつ、止めようよ。危ないよ」

「ワタルくん、次は私がやるわ!」

俺が瀬木のことを褒めたのが不満だつたのか、久美子がサッと俺の手からモップを奪うと、石畳に柄の先で触れた。

こんな時、久美子は行動力がある。止める間もなかつた。

久美子が柄で石畳に触れた瞬間、急いで周りに目を配つた。戻のスイッチが入つたとして、その場所で作動するとは限らない。

全く別の場所で、何かが起きる可能性もあるわけだ。身構える俺達の前で、力チヤリと不気味な作動音が響き渡つた。

ガチヤンガチヤンと音がして、少し離れた場所の石畳

が左右に開く。

「どうやら窪みは落ピットとし穴のスイッチだつたようだ。

「わわ、なにこれ!」

突然□を開いた落とし穴に驚いた瀬木が、俺に抱きついてくる。

「どんだけ臆病なんだよ」

「……ごめん」

瀬木が頬ほおを赤らめて恥ずかしそうに微笑ほほえむので、俺も誘われて笑つた。まあ仕方がない。

臆病なぐらい慎重なほうが、無謀よりはなんばかマシだ。

「きやあああああ！」

瀬木が離れると、俺達の様子を見ていた久美子もわざとらしく悲鳴をあげて抱きついてきた。

無い胸を俺の腕にやたらこすりつけてくる。

こうやつて抱きついてくると、艶やかな髪から一丁前にいい匂いがしてくるのがムカつく。

ちなみに瀬木もすげー甘い香りがした。本当に男だよな？

「いや、きやーつて。久美子、お前が罠を作動させたんだろ」

「だつて、瀬木くんばつかりずるいわ」

「お前はもうそやつて、一生ふざけてろよ」

「うそうそ。真剣に怒らないでよ、謝るから。ごめんな

さい

「全く……」

いつものやりとりを見てようやく落ち着きを取り戻した瀬木が、俺から少し離れて呟く。

「で、でも……落とし穴って、大した罠じゃなくてよかつたよね？」

「いや、大した罠だぞ。落とし穴を舐<sup>な</sup>めてたらヤバイことになる」

問題は今開いた落とし穴をどうするかだ。

久美子の前に立つて、入念に落とし穴を調べることにした。二重にトラップが仕掛けられていることもあるので注意しつつ、穴の底を松明で照らしてみる。光の届く

範囲から推測するに、だいたい二メートルから三メートルの深さだろうか。

穴の周りを囲んでいる壁は見えない。少し広い部屋になっているのか、もしかしたら下にも通路とかがあつて、そこに通じているかも知れない。

「この穴を降りてみることはできないの？」

久美子が、そう聞いてくる。

危険な発想ではあるが、落とし穴が実は安全な出口つて可能性もないことはないか。

だが、底が見えない落とし穴を降りるのは無謀だ。床があれば無事に着地できるかもしれないが、一度降りたら今度は上に登る手段がなくなる。そもそも飛び降

りた先に槍<sup>やり</sup>が生えている可能性だつて否定できない。

「どう考<sup>え</sup>ても、ここを降りるのは危険すぎる。」

「ロープでもない限り、下に降りるのは無理だ。お前ら、落とし穴の意味をよく考<sup>え</sup>ろ。この高さからいきなり底の見えないところに飛び降りたら無事じやすまない。よくて捻挫<sup>ねんざ</sup>、悪いと骨折するかもしれない。誰の助けも期待できないこの状況で、足を骨折したらどうなる？」

俺の説明を聞いて、瀬木はごくりと唾を飲みこんだ。降りてみることはできないの？ なんてのんきに聞いてきた久美子ですら渋面になつた。

落とし穴と聞くと、バラエティー番組でよく芸人が落とされてるイメージしかないが、本来は動物を狩るため

の殺傷トラップなのだ。

人がマンモスを狩りだした原始時代から、近年のベトナム戦争に至るまで、落とし穴は単純だが効果的に敵を殺す罠だ。

つまり、この罠を仕掛けた奴は、俺達が死んでもいいと思つてゐかもしけないつてことだ。

「久美子もあんまり先走るなよ。この状況は思つたより危ういぞ」

気丈に振る舞う久美子は、少し無理をしているようにも感じる。

「私はワタルくんのためだつたら、死んでもいいよ？」  
前言撤回だな。

やつぱりふざけた女が、ふざけたことを言っているだけだ。

俺もふざけて返すことにした。

「ふーん。じゃあ久美子には、俺のために肉壁となつて死んでもらうか」

「そこは絶対死ぬとか、俺が死なせないって言うことでしょ？ いくら照れ隠しにしても、肉壁になつて死ねつて返すのは酷すぎじやないかしら」

怒った顔をする久美子を、瀬木が苦笑いしながら慰める。

「しようがないよ。真城くんつてそういう人だもん」「そつか、ワタルくんだもんね。『俺が代わりに命を投

げ出しても、君のことを守るよ』とか男らしく言つてくれるのでを期待した私がバカだつたわ』

急に理解し合つて、なんなんだよお前ら。  
変な結託の仕方をするなよ。気持ち悪い。

肩をすくめて意味ありげな笑いを交わし合う不愉快な二人に、俺が文句を言おうと口を開きかけたところで。二人の後ろからワイワイと雑談している緊張感のない集団がやつて來た。

「おー、あれ久美子ちゃんじゃね！」

「よかつた。九条久美子くん、ここにいたのか」

来たのはA組の連中のようだつた。いちいち他クラスの生徒まで覚えていないが、集団の中心になつてゐる男子

生徒には俺も見覚えがあつた。

それにしてもA組の連中は纏まつたと思つたらこっちに来たのか。

教師達が役に立たない状況で、俺達を除けば、自分達で決断してここまで来たわけで、さすがに優等生集団といつたところか。

「あら、貴方達も來たのね」

冷たい声で呼びかけに応えた久美子は、澄ました優等生の顔に戻つていた。

ちなみに「九条久美子くん」と張りのある声を掛けた長身の美丈夫が、七海修一。なみしういち。学年でも最優秀の生徒で、他人の興味のない俺ですら見覚えがある有名人だ。家柄

は金持ち、眉目秀麗、学年成績は当然のよう毎回一位。学業だけではなくスポーツ面でも優秀で、所属しているバスケ部では一年生なのにレギュラーメンバー。

文武両道つて奴だな。ここまでは、百歩譲つてまだわかる。

だが、それに加えて一年のに生徒会長に名指しで副会長に指名されて、学校行事でもリーダーシップを發揮するまでいくのはいくらなんでもできすぎだ。ここまで の高スペックなので、女にモテるかと思いきや特定の恋人はおらず、告白される率はさほど高くないらしい。

男版高嶺の花つて奴で、挑戦するのはちよつと勇気が要りそうだ。後はよっぽどの自信家だろう。そう、例え

ば七海と同じ様に、一年生のうちから生徒会に所属している奴とか。

そう思つてチラツと久美子に流し目を送つてやるが、そつけなく無視された。過去のこととは思い出したくもないのか、反応がなくてつまらない。

とにかく七海修一つてのはうちの学校でも抜きん出た優等生だ。どんな教師よりも頼もしく優秀で、人を率いることに長けた生まれついてのリーダーである。

「よかつた。クラスに久美子くんがいなかつたから心配してたんだ。んつ、そちらにいるのは、F組の真城ワタルくんと、瀬木碧くんかな」

瀬木はともかく、俺の名前まで呼ばれたのでちよつと

驚く。

「ほう。七海副会長が俺ごときを覚えていてくださつた  
なんて光栄ですな」

なんでこいつ、俺の名前なんか覚えてんだ？

俺が七海修一と話すのはこれが初めてのはずだぞ。  
超がつくほどの優等生として目立っている向こうはど  
もかく、俺みたいなF組の生徒の顔と名前まで覚えてい  
るとは意外だつた。

「これでも僕は生徒会の人間だから、生徒の顔と名前は  
なるべく記憶するようにしているんだ」

「ここまで超人だよ。爽<sup>さわ</sup>やかで嫌味がないのが逆に嫌味  
つたらしい。」

学校の有名人に声を掛けられて瀬木は喜んでるみたいだが、俺は七海副会長があまり好きじゃない。

七海は、優等生すぎてなんか胡散臭いんだよな。同じ優等生でも、実は面白い性格の久美子とは違う。七海に裏がなく聖人君子の部分が眞実だとしても、あんまり知り合いにはなりたくないな。

「なんだこれは。ひよつとして落とし穴か？ 一体誰がこんな危険なものを持った？」

学校一の優等生の七海は、落とし穴を見つけて呟く。どうやら副会長様も、落とし穴の危険性を理解しているようだ。

「七海副会長。ここは罠があるから、あんまり歩き回ら

ないほうがいいですよ」

便宜上、形だけの忠告はしておく。あとはこいつらがどうなるうと知つたことではない。

そつと、瀬木の手を引いて静かにその場を離れることにした。

「ど、どうしたの真城くん？」

「いいから黙つて、ゆっくりと元の通路に戻るぞ」

なぜか赤くなつた瀬木に小声で指示してから、一応、久美子にも目配せしてやる。

久美子もコクンと頷くと、何も言わ<sup>うなず</sup>ず付いてきた。

A組の奴らが入つてきた瞬間、俺はここが危ない場所になつたと感じた。

なぜならあんなに手の込んだトラップがあつたのに、それが一つであるはずないからだ。

七海率いるA組の連中がどれだけ優秀か知らないが、周りを見ずうかつにダンジョンをズンズン進んでいくのは迂闊すぎる。

罠を作った者の意図がわからぬままこんなところを歩き回つていれば、確実に良くないことが起きる。

忠告はした。

あとは、七海達A組のグループが前に出てやらかしたとしても自己責任というものだ。

俺は非情だから、むしろいい実験台になつてくれそ  
うだとさえ思つてゐる。

尊い犠牲に感謝しつつ、俺達だけは災いに巻きこまれないよう引かせてもらう。

そう思うが早いか、さつそく、誰かが何かを踏んだらしく、ガチャツと音を立てて右側の壁に扉が開いた。

もしかしたら、罠ではなく隠し通路か？

一瞬そんなことを思つたが、やつぱり罠だつたようだ。隠し通路から豚面ぶたづらの顔をした人間っぽい化け物が飛び出してきた。手には武器を持つている！

「あつ、なにあれ？」

ショーンの着ぐるみとでも思つたか、状況を理解できていない瀬木がのんきなことを言つた。

「わからん、とにかく勝目もふらず逃げろ！」

まさか変質者が豚のマスクを被つて変装してるのでわ  
けでもあるまい。いや、変装しているかどうかなんてこ  
の際どうでもいい。

鈍い輝きを放つ鉈<sup>なた</sup><sub>バトルアックス</sub>やら戦斧<sup>なた</sup><sub>バトルアックス</sub>やらを手に持つて近づいて  
くる奴らが、友好的なわけがない！

ここが本当にRPG風のダンジョンだとすれば、あれ  
はオーフつてモンスターじゃないかな。

後ろからようやく七海達の悲鳴が聞こえてくるが、俺  
は無視して全力で逃げた。

こつちはろくな武器もないのに、刃物を持った敵対的  
強者と対峙<sup>たいじ</sup>したくない。

だからここで戦うつて選択肢はない。逃げの一択だ。

「うわああああ、あれ怖いよ！　真城くん、ねえ、あれ何なの!?」

「うるさい瀬木！　叫んでる暇があつたら全力で逃げるんだよ！」

瀬木はもう泣いているというより叫んでいる。男の子としてはちよつと情けないが、むしろそれが普通か。

女子のくせに、平気な顔をして俺達より前を走る久美子のほうが、どちらかというと異常だ。

一緒にいるのがこんな時に泣き喚く女子でなくて良かつたともいえる。

走りながら、久美子が呟く。

「さつき出てきたのって、オーワクっていうアプリのゲー

ムに出てくる豚のモンスターかしら?」

「久美子。お前スマホのゲームアプリなんかやつてるんだな」

優等生なのに意外。

「ワタルくんはいつも私にふざけるなって言うけど、こんな時なのにワタルくんも結構余裕よね?」

「まあな」

奴らが来た時点でなんとなくこんなことになるんじやないかとは思つてた。悪い予感ほど的中するものだ。

さて、逃げたはいいがいづれは教室の前の廊下は行き止まりだ。

手元の武器は、俺が松明、久美子がモップを持ってい

るだけ。

「このまま逃げ続けても、ジリ貧になりそうだな」

「何とか撃退する手段を考える?」

久美子がそう聞いてくる。

そうだな。

こつちは生徒の数が多いから、誘いこめば何とかなる  
かもしれない。

「ねえ真城くん。さつきの豚みたいな顔の大柄なのが三  
人いたけど、それ以外にも鬼みたいな角の生えた緑色の  
小柄なのが二人いたよ」

「瀬木、お前あれだけビビつてたくせに……よく見てた  
偉いぞ」

走りながら頭をクシャツと撫<sup>な</sup>でた。俺に褒められて瀬木は嬉<sup>うれ</sup>しそうな顔をしている。

あの状況で敵の数を把握してるなんて、上出来だ。こんな時にも冷静な久美子はともかく、臆病な瀬木だけは守つてやらないとな。

俺は松明を握りしめた。

豚面をオーワとするなら、小鬼はゴブリンってところか。

全く、本当にRPGの世界に迷いこんだみたいだ。

「瀬木、武器がないなら石でも拾つておけよ。拾つて投げれば、それも十分武器になるぞ」

綺麗<sup>きれい</sup>に見えるダンジョンの石畳にも、よく見ると小石

がちらほら落ちてる。

これで致命傷は与えられなくても、牽制するための飛び道具くらいにはなる。ないよりずつとマシだ。

瀬木の眼を信じるなら、敵はオーワクが三体、ゴブリンが二体。

バトルが発生する時は戦力把握が重要だ。俺も次があれば気をつけて見ておくことにしよう。

とりあえずC組の教室前まで逃げてきたが、化け物はまだ追つて来ない。ここは俺達だけで戦わず、他の生徒に助けを求めるべきだろう。

最悪、肉壁に使えるかもしれないしな。

一クラスに三十人だから、単純計算でいけばここには

生徒が百八十人、先生が六人いる。

敵の数と比べれば、味方の多さは凄まじい。<sup>すさまじい</sup>

だが、それはあくまで一丸となつて戦えばの話で、さつきのA組の連中みたいに今ここにいない者もいれば、ここにいる面子だつて教室や廊下にバラバラに散開していたりする。

下手に声をあげると、纏まつて戦力にするどころか、逆にパニックを起こして足手まといになるだけのような気もする。

「基本的には他の奴が攻撃されている隙<sup>すき</sup>にやつつけ

⋮⋮⋮

俺が瀬木と久美子にそう言いかけたところで、その声

をかき消すほどの大きな声が響いた。

「みんな、助けてくれ。武器を持った敵が来るぞ！」  
肩口をざつくりと斬られた男子生徒を抱えて、七海修一が駆けこんできた。

あの状態で仲間を抱えて逃げるだけの余裕があつたんだな。やつぱ七海は出来が違う。いつぞ出来杉くんに苗字を変えたほうがいいんじゃないかな。

だが、そこまでできるならどうして最初からこういう事態を考慮して、武器を持たなかつたのかと思うが……。  
まあ常識的に考えたらモンスターに襲われるなんて考えないか。RPGなんかに慣れ親しんでいる俺とは、感覚が違うんだろう。

「よし、なんだか知らんが俺がやるぞおおーつ！」

七海副会長の叫びに呼応して、モップを持った囮体の大きな男子生徒が駆けこんできた。

いきなり現れた化け物に躊躇なく突っ込んでいくつて凄まじい奴だ。

思い出した。こいつ、一年では有名な猛者だ。

超高校生級の巨軀<sup>きょく</sup>に、後ろに流した黒い総髪。

まるで古武士のような鋭い眼光。確か剣道部で、全校集会で表彰させていた。

県大会の個人の部で優勝したあとで、同じ部の上級生にやつかみで絡まれて、全員を一人で叩<sup>たた</sup>きのめしたって武勇伝の持ち主だ。名前は……なんだつけ。

「三上直継くんか！ 賴む！」

「任せておけ、副会長さん！」

「そうだつた。確かに『無双の三上』とか恥ずかしい名前で呼ばれてたな。クラスは、C組だつたと思う。

「どういうこだわりか知らないが、七海修一はたいていフルネームで話しかけるので、人の名前を思い出すのに便利だつた。

「こんな時に笑つてるなんて、ほんと余裕ね」

「俺、笑つてたか？」

「でも、今まで倒すのが大変だとは思つたが、ここに来て勝てる流れが出てきたんだ。笑みぐらいたるも当然だ。」

「久美子。この流れなら行けるぞ。俺達も三上に加勢してやろう」

どうせ倒さなきやならない敵だ。それに、剣道部の三上が先頭に立つてくれるなら、対処のしようもある。三上は、走りこんできた先頭のオーワの喉元に思いつきモツプの柄を突き刺した。

卵こんとうが潰れるような音を立てて、オーワが一撃で仰向あおむけけに昏倒こんとうする。

凄まじい刺突。見てるだけで息が詰まりそうだ。

オーワは叫び声をあげる間もなく咽頭部を潰されて倒れた。おそらく即死。

見事な突き技だ。さすが無双。

敵は少し息が上がつていい。不幸中の幸いというべきか、七海達が逃げまわることで敵を走らせてバテさせることには成功していたのだ。

これなら、率先してモンスターに襲われて死んだA組の犠牲者も無駄ではなかつたといえる。

俺は松明で子供ぐらいの背のゴブリンの顔を焼いてみた。

そいつが振り回してたのはショートソードだつたし、ちよつと走つただけでバテてたのか、動きが鈍いので余裕だつた。

松明の炎に、ジュツと音を立ててゴブリンの顔が焼ける。「ギイツ！」と甲高い声をあげて怯んだ。

かんだか

ひる

そのまま松明でもう一度殴りつけてやつたら、ショートソードを落としたので、あとは短い足に蹴りを入れて転倒させてから、思いつきり頭を踏みつけてやつた。動かなくなるまで、頭を蹴り続ける。

なんだ、コイツら恐ろしい見た目ほど強くないじやないか。

俺はショートソードを拾い上げると、ゴブリンの胸に突き刺した。普通の生物ならこれで死ぬだろ。

生き物をこの手で殺す感触は、なんとも言えない後味の悪さがある。

それに、緑色の返り血で、制服が汚れてしまつた。

「真城くん、よく殺せるね……」

少なくとも今は何かに躊躇している時ではない。

「瀬木、そんなこと言つてないで、お前も後ろから石でも投げてろ！」

俺はそう叫びながらも、普通の高校生にいきなり戦闘しろつてのは無茶だなとはわかつていた。

突然ダンジョンに放りこまれただけでもパニックなのに、更にモンスターと殺しあえなんて無茶苦茶だ。

初めての戦闘に少ない犠牲で勝てたのは、たまたま荒事に慣れてた三上がみんなを先導できたからだ。

そう考えれば、まだしも運が良かつたといえるかもしない。

「瀬木、お前はこの松明で照らしてくれ。弱いゴブリン

なら、松明の炎でも怯むぞ」

モンスターも火は恐れるとわかつた。これを持つれば瀬木は安全だろう。

「真城くん、ありがとう」

そうこうしている間に、久美子が拾ってきたモップでもう一匹のゴブリンを突き殺していた。

俺だつて荒事には多少慣れてるつもりだが、三木直継も九条久美子も、本当にただの高校生かよ。

こういう時に、躊躇わざ<sup>ためら</sup><sub>や</sub>殺れる奴つてのは意外にいるものなんだな。

遅れてさらに残り二匹のオーケークがこつちにやつてきたが。

七海副会長のお仲間がモップをたくさん抱えてやつてきて、七海の指示でみんなで一斉に突きかかったので、モンスターを倒しきることができた。

これで、最初に出てきた五匹は倒せたことになる。やはり戦は数つてことか。

最初にモンスターの攻撃によつて、A組の生徒は一人死んで、一人が肩をざつくりと斬られて重傷だそうだ。

怪我人はこのまま放置しておけば死ぬ。

そこで、自然と学生達のリーダーとなつた七海修一が呼びかけた。

「誰かが助けを呼びに行かなきやならない。進める者で先に進もう」

七海修一の鶴の一聲で、生徒から有志が選抜されて先に進むこととなつた。

一声かけるだけでみんなが付き従う。こういうのを力リスマ性つていうんだろうな。

本来なら率先して動くべき先生達も、七海副会長の判断に任せきりになつてる。

先生達は残ることにしたらしいが、俺達は七海副会長の戦闘集団について行くことにした。

集団行動はあまり得意じゃないし、積極的に協力したいわけじやないが、どうせ前には進むつもりだつた。

それに、まだ危険なダンジョンを独りで動く自信はない。集団で行つたほうが効率的だろう。

しかし、何か既視感<sup>デジヤビュ</sup>めいたものを感じる。

このダンジョンの構造、どこかで見た覚えがあるんだよな……。

そんなことを考えてると、瀬木が声を掛けてくる。

「真城くん、僕も一緒に行くよ」

「瀬木、お前は先生達と教室で待つていいんだぞ？」

「真城くんも行くのに、僕が行かないわけにはいかないよ」

「罠<sup>がい</sup>が作動しただけで足を震わせていたほど臆病<sup>がい</sup>なのに、友達甲斐<sup>がい</sup>のある奴だ。」

「じゃあ護身用にこれやるよ。持つてろ」

「うん、ありが——こ、これちょっと汚い……」

瀬木は、ゴブリンの緑色の血に染まつたショートソー  
ドを見て眉を顰めた。

「汚くても武器はあつたほうがいいだろ」

「それはそうだけど。真城くんは？」

「俺はモップがある」

これでもゴブリンぐらいは殺せるからな。

他人のことなど知ったことじやないが、瀬木ぐらいは  
守つてやろうと俺は決意を固める。

「私もいるわよ」

なぜか当然のごとく久美子も付いてくるが、お前の面  
倒は見切れないから勝手にしろ。

だいたい久美子なら自分の身くらい自分で守れるだろ。

そう思つてたら、久美子だけではなく他の女子達まで来てしまつた。

「九条さんも一緒にいくんですね」

「よかつた。私達だけで不安だつたから！」

「一緒にがんばろう」

女子が三人も来た。かしま姦しい。

こいつらも七海副会長の戦闘集団に参加するらしい。俺じゃなくて、久美子を頼つて近づいて来たんだろうけど。

死ぬかもしれないダンジョンを行くのに、お前ら本当に大丈夫なのか。

同行を断らないところをみると、それなりに久美子と

仲の良い女生徒らしい。

久美子が仕方なさそうに三人のこと説明する。

「みんな私と同じA組の生徒よ。メガネをかけてる長い  
髪の無駄に胸が大きいのが佐敷絵菜、活発な茶髪のポ  
ニーテールが真藤愛彩、大人しそうなボブ・ショートが  
立花澪。一緒に行くからって、ワタルくんは誰とも仲良  
くなる必要はないけどね」

俺に絡みつくように身体を寄せて耳打ちしていく久美  
子。

「俺もA組の女子と仲良くするつもりはねえよ」

「あら、それは僕倅」

俺はお前とも仲良くするつもりはないんだぞ、久美子。



ここに来てから段々久美子のスキンシップが過剰になつていく。

A組の生徒の前では大人しくしてるんじゃなかつたのかよ。

あと、いくら自分が無乳だからって「無駄に胸が大きいつて」つて紹介は酷いだろ。

そう思つて目配せしたら、□にしなかつたのに伝わつたのかギロツと睨にらまれた。

「失礼ね。私だってちよつとはあるんだから、それはワタルくんだったてよく知つてるでしょ?」

知らん。俺はそもそも女の乳の大きさなんてどうでもいい。

寄ってきた女子は、久美子に負けず劣らずの美少女揃いだが、容姿なんかこの際どうでもいい。

ただでさえ危険なダンジョンで自分の身を守るのに精一杯な今、他人に关心を持つて情を移すような真似まねをしだくない。ましてや女子とか、足手まとい以外の何者でもない。

それなのに、胸がデカい佐敷つて女子が話しかけてきた。

「あの、九条さんの彼氏さんですね……」  
「彼氏じゃねえよ！」

無視するつもりだったがつい怒鳴ってしまった。  
「彼氏じゃないんですね……ごめんなさい」

怯えたような表情を浮かべて、ペコリと頭を下げる。ほんと胸が大きいな。制服の上からでもデカいのがわかるつてのは相当だ。スカートから覗く太ももがムチムチしている。全体的に肉付きが良くて、グラビアアイドルみたいな女子だな。

「この人がF組の真城ワタルくんよ。私とは友達以上恋人未満って間柄ね」

久美子がなんか言つてる。

「恋人じゃねえし、友達かさえも怪しいところだ」

勝手に彼氏にされてたまるか。

もう一人の茶髪のポニーテールも声を掛けてきた。

こつちはこつちで、スラツとした感じのスタイルのイ

イ女である。

「まあまあ、しぶらくは一緒に行くんでしょ。真城くんも、仲良く行こうよ」

確か真藤という名前の女子は、俺に手を差し出してくれる。

「何のつもりだ？」

「握手だよ」

俺が仲良くする気はねえと手を振ると、強引に握ってきやがつた。

こいつはスタイルが良くて、何かスポーツをやつてそういう雰囲気がだが、それでも手は柔らかい女子のものだつた。

「俺は知らない奴らの面倒まで見きれないからな」「ははつ。私だってこう見えても剣道をやっているんだ。男子に面倒を見てもらおうとは思わないよ。この子達ぐらいは、守つてみせる」

真藤はモップを青眼に構えて得意げに振つてみせる。「……まず、他人より自分の生き残ることを考えるよ」「忠告に感謝するよ」

俺の忠告に何を思ったのか、真藤は爽やかに笑つてみせた。

全くどいつもこいつも慣れ合いやがつて。

最後の一人、佐敷や真藤の後ろに隠れてじつと無表情でこつちを見てるだけの立花澪つて女子だけが、絡んで

こないだけ一番マシだつた。

※※※

「わああああああああ！ 愛彩ちゃんつ！」

むせ返るような死臭に、俺は息苦しさを覚えた。  
俺の目の前で、白いセーラー服に赤い血糊ちのりがベツタリ  
とついた女子生徒が泣き崩れていた。

顔には血痕が飛び散り、かけているメガネはひび割れ  
ている。

血まみれの女子生徒は、さつきまで生きていた友達の遺  
体を抱きながら、何度も何度も名前を呼び続ける。

それは程なくして意味をなさない絶叫へと変わった。

俺は思わず目を背けた。

少女の絶望的な金切り声は、聞いているだけで気が滅めいつてくる。

泣き叫んでるのは佐敷絵菜で、その身体にべつとりとついているのは抱いている真藤愛彩のものである。

俺達の周りで最初に死んだのは茶髪の女子、真藤愛彩だつた。つい先程まで活発に動き回っていたのが嘘のようだ。

彼女は最初に宣言したとおり率先して前に出て、仲間達を守るためにモップを振るつてモンスターと戦つていた。

そして、前から飛んできた矢に気がついて、咄嗟とつさに佐敷絵菜を守ろうと前に出たのだろう。

おかげで佐敷は助かつたが、真藤は正面から流れ矢の直撃を喰らつてしまつた。

たまたま近くにいた俺は、真藤の最後の「絵菜！」と  
いう叫びとザクッと頭蓋骨が砕ける音を聞いた。

額にぶつとい矢が突き刺ささつた。ポニーテールの女子生徒は、それでもヒュー、ヒューと笛が鳴るような声を出して生きていたが、程なくして息を引き取つた。

だから言つたんだ。

こんな状況では、他人を助けようとする良い奴から死んでいく。

鋭く尖つた鎌<sup>やじり</sup>が頭の中まで貫通して、即死しなかつたのはまだ運が良かつたのだろうが、助からなければ同じだ。

いや、むしろ苦しんで死ぬ分だけ運が悪かつた。

から、重傷者は手当てのしようもない。

俺は頭を斬られて死んだ坂本龍馬<sup>さかもとりょうま</sup>も、こんな感じだつたのかなとか不謹慎なことを考えていた。

風来山

イラスト kero介

GenoCide Reality

Story by huuraisan

Illustration by  
kerosuke

# ジェノサイド・リアリティ

異世界迷宮を最強チートで勝ち抜く

異世界迷宮を  
**最強チートで**  
**勝ち抜く!!**

「小説家になろう」超王道!!  
書き下ろし短編2本収録!!

GA文庫

孤独な少年がダンジョン深く潜る異世界最強ファンタジー!!

「ジェノサイド・リアリティ  
異世界迷宮を最強チートで勝ち抜く」  
2017年7月15日発売予定!!  
どうぞよろしくお願ひします!!